

# 生徒の資質・能力をどのように育むか

—教員の自主的参加による「学校活性化委員会」の実践を通して—

林 誠一 ・ 中町 保

# 生徒の資質・能力をどのように育むか

—教員の自主的参加による「学校活性化委員会」の実践を通して—

林 誠一<sup>1</sup> ・ 中町 保<sup>2</sup>

## How to Develop the Qualities and Abilities of Students —Through the Practice of the "School Revitalization Committee" with the Voluntary Participation of Teachers —

Seiichi HAYASHI, Tamotsu NAKAMACHI

### 概要

メンバーを固定せず、希望する教員が自由に参加できる委員会を設置し、「本校の果たすべき役割」や「育てたい生徒像」など、学校の方向性にかかわる事項について話し合った。個々の教育活動を通じて、生徒にどのような資質・能力を育みたいのか、そのために何をすべきなのかといった学校の根幹にかかわる部分について、より多くの教員が意見を出し合って決めたことは、学校全体での共有もしやすくなる。このようなボトムアップの意思決定方法は、新しい時代に向けた学校改革や授業改善につながり、それが生徒の資質・能力を育むことにもつながる。

**キーワード**：資質・能力の育成，ボトムアップ，ルーブリック，校内研修

**Keywords**：Development of Qualities and Abilities, Bottom up, Rubric, School Training

### I. はじめに

急速な情報通信技術（ICT）の進展やグローバル化など、変化の激しい社会を生きる子どもたちに、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた「生きる力」を育成することがますます重要になっている。新しい学習指導要領においては、各学校が今後、教育課程を通じて子どもたちにどのような力を育むのかという教育目標を明確にする必要性を指摘している<sup>(1)</sup>。また、資質・能力の要素として、「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」の三つの柱全体を捉え、教育課程を通じてそれらをいかに育成していくかという観点から構造的な見直しを行い、教育課程について「何を知っているか」という知識の内容を体系的に示した計画にとどまらず、「それを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」までを視野に入れる必要があるとしている<sup>(2)</sup>。

これからの教育には、社会がどんなに変化し予測困難な時代になっても、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現するための資質・能力の育成が求められている。そのた

めには、教員自身が、新学習指導要領に示された、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を行い、新たな学びを工夫する必要がある。

ここでは、教員の授業改善の意識の高まりが、教員が自由に意見交換できる場を設けることにつながり、それが生徒の資質・能力の育成を目指した活動へとつながったことを、2017～19年度までの3年間、筆頭著者が校長として勤務していた富山県立砺波高校における実践を踏まえて報告する。

### II. ボトムアップで資質・能力の育成を目指す

富山県立砺波高校は、創立110年を超える伝統の下、ほとんどの生徒が国公立大学への進学を目指す地域の中核校であり、地域に根差した教育活動を展開している。

一方で、高校は県内でも少子化が顕著な地域にあり、生徒の多様化も進んでいる。新しい学習指導要領が2022年度から学年進行でスタートするとともに、高大接続改革など、高校教育を取り巻く環境が変化する中で、学習指導や生徒指導などは従来そのままでのよいのか、教員が思い悩む姿も見られるようになった。

#### 1. 教員の自由な意見交換の場を設定

2018年3月に、教員が校内で率直に自分の考えや思いを言い合える場を設けようと、誰でも参加できる「学校活性化委員会」をスタートさせた。同委員会は、新た

<sup>1</sup> 富山大学大学院教職実践開発研究科 <sup>2</sup> 富山県立砺波高等学校

に立ち上げた企画研修部<sup>(3)</sup>が運営を担い、メンバーは固定せず、毎回、希望する教員が自由に参加できるようにした。自主的に自由に参加できる委員会であったが、2018年度に開催した4回の委員会には毎回約20名(全教員の約1/3)が参加した。グループに分かれて話し合ったところ、話題は授業改善や行事の見直し、教職員間の情報交換のあり方など多岐にわたり、活発に意見が飛び交った。

## 2. 育成を目指す生徒像を委員会で議論

初回の委員会で作された様々な意見を整理するため、2018年7月に行った第2回目の委員会では、自校の現状を把握するSWOT分析を行うことになった。地域や生徒、教員など自校の強みと弱みを出し合い、それらを整理した上で、学校としてどのような生徒を育てたいのか、そのためにはどのような資質・能力を身につけさせればよいのかを話し合った。



学校活性化委員会 (SWOT分析)

そうした中で出てきたのが、育成を目指す資質・能力を「〇〇力」などの短い言葉に整理した方がよいといった意見だった。それは、素直で真面目な生徒だからこそ、授業や行事、部活動を通じて身につけてほしい資質・能力を分かりやすい言葉で示せば、生徒は教員からのメッセージを真摯に受け止め、それらの資質・能力を身につけようと自ら行動するのではないかという考えに基づいたものだった。

以下は、学校活性化委員会において、育成を目指す生徒像を議論した2018年度の概要である。

<第1回委員会(7月6日)>

SWOT分析による学校の強み・弱みを整理し、本校の使命、地域、父兄、中学生から求められていることは何かについて議論。

<第2回委員会(9月7日)>

本校はどのような生徒を育てたいのか、そのために身につけさせたい力とは何か、その力をつけさせるには、授業や行事、各種活動はどうあるべきなのかについて議論。

<第3回委員会(12月3日)>

校内研修を「拡大活性化委員会」と位置付け、9月に話し合った内容をさらに深めると同時に共通理解を図る。

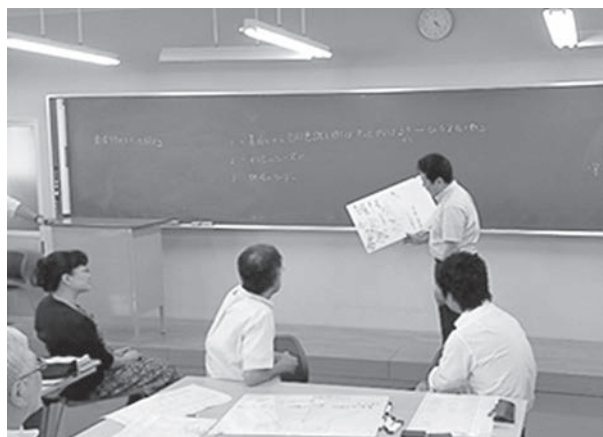
<第4回委員会(1月11日)>

授業、行事、各種活動の目的(ねらい)を再確認し、その中で「身につけさせたい力」の明確化を各学年、各分掌に依頼。

## 3. 学校教育目標を学校全体で議論

学校で育成を目指す生徒の資質・能力は、学校活性化委員会に参加した教員が学校の現状や目指す姿について率直に話し合い、その意見を職員会議で議論しながら、言わばボトムアップでつくり上げた。高校は、一般に学年や分掌の独立性が強く、教育活動の設計や計画は学年や分掌に任されることが多い。しかし、個々の教育活動を通じて、生徒にどのような資質・能力を育みたいのか、そのために何をすべきなのかといった学校の根幹にかかわる部分は、学年や分掌を超えて学校全体として考えることが大切になる。そういった意味で、本委員会は誰でも参加でき、みんなで学校のあり方について議論できる大切な場になった。

この委員会のメンバーが中心となり、「育てたい生徒(人物)像」について検討し、そうした生徒が備えるべき資質・能力を「8つの力」に整理、それらを「TGP(Tonami Graduation Policy)」と名づけた(別添資料1)。そして、生徒がTGPの到達度を自己評価するためのループリックも作成した(別添資料2)。3年間で身につけさせたい力をTGPとして示し、広く生徒に浸透させ、折に触れてTGPを意識しながら今後の学校生活に取り組みせると同時に、定期的にループリックによる振り返りを行うことで、生徒の資質・能力の育成を目指した。



学校活性化委員会(議論の様子)

## 4. 行事や单元ごとに身につけたい力を明示

TGPの「8つの力」やループリックは、企画研修部が案を作成し、それを学校活性化委員会で吟味し、練り上げていく方法で進めた。委員会では、「人間力という

言葉は概念が大きすぎるので、本校に合った言葉にした方がよいのではないかと「ルブリックの文言は、生徒が読んで理解できる分かりやすい言葉にしよう」など活発な意見交換が行われ、企画研修部が提出した案には、何度も修正が加えられた。そうして完成したTGPとルブリックは、2019年度1学期末の終業式で初めて生徒に示した。生徒は、その直後に行ったホームルームで、ルブリックを基に、現在の自分の達成度を自己評価した。

次いで、行事ごとにTGPの中でも特にどの資質・能力を育むことを目指しているのかを示した一覧表の作成に着手した(別添資料3)。それにより生徒は、例えば「体育大会では、協働力と行動力を高めることを目指して頑張ればいいんだ」など、目標を持って活動に取り組むことができるようになって考えた。なお、行事ごとに重点を置くTGPを決め、1つの行事の中で多くの資質・能力を育成する表にならないようにした。さらには、各教科・科目の単元ごとに、それぞれ身につけさせたい資質・能力を明示した教育課程表の作成も進めることにした。

ルブリックによる生徒の自己評価は、学期末や主要な行事の際に行うこととし、4段階(S, A, B, C)での自己評価を書き込むだけでなく、前回と比較して具体的にどんな部分が伸びて、現時点での課題は何かも書き込める欄を設けた。それをポートフォリオとして蓄積していけば、生徒はそれまでの自分の歩みを振り返ることで、現在の自分の到達点が確認でき、新たな目標を設定して踏み出すことが容易になる。また、教員も面談などの場面で、ポートフォリオを参考にしながら、生徒に対して効果的なアドバイスをしていくことが可能になる。

以下は、学校活性化委員会において、TGPについて検討した2019年度の概要である。

<第1回委員会(6月19日)>

昨年度の検討を踏まえ、育てたい「8つの力」について見直し、生徒の自己評価票を検討。

<第2回委員会(6月29日)>

「8つの力」の内容を確定し、TGPと命名。校訓との関わりについて検討し、評価票を修正。

<7月>

各種活動でTGPのどの力を育てたいのかを明確化するため、各分掌に検討を依頼し整理。職員会議で共有。

終業式にて、全校生徒にTGPのねらいとその実施について知らせる。終業式後、生徒は各クラスで自己評価票を記入。(1回目)

<9月～>

TGPを行事ごとの一覧にし、クラスに掲示。

<第3回委員会(11月22日)>

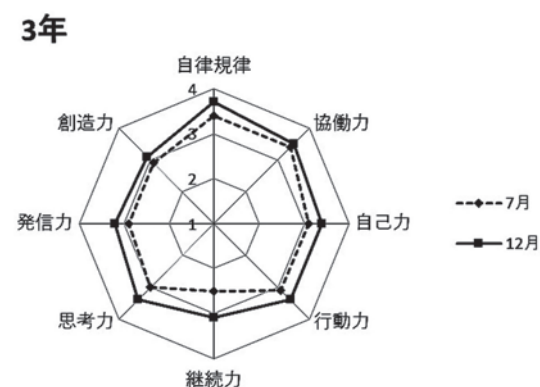
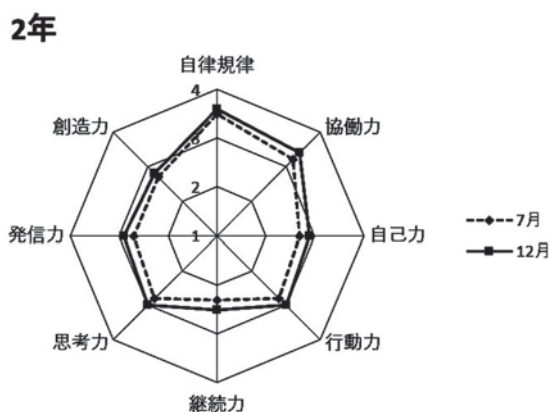
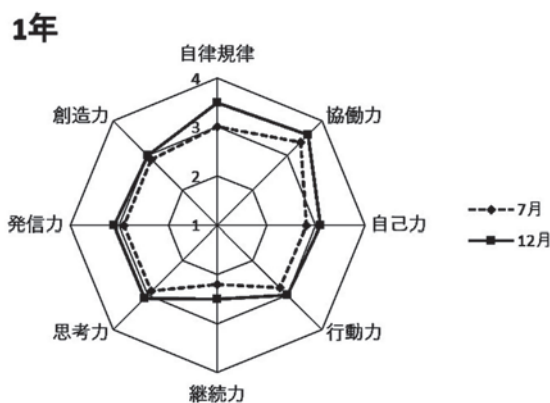
授業改善について情報交換。教科横断型の授業の可能性などについて検討。

<12月>

2学期終業式後、生徒が自己評価を記入。(2回目)

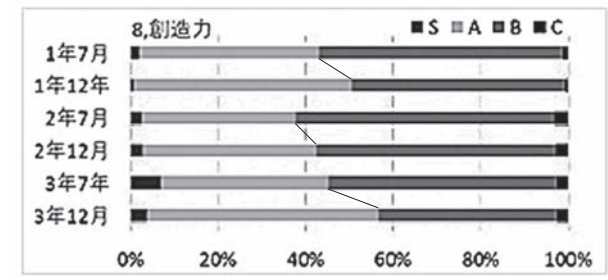
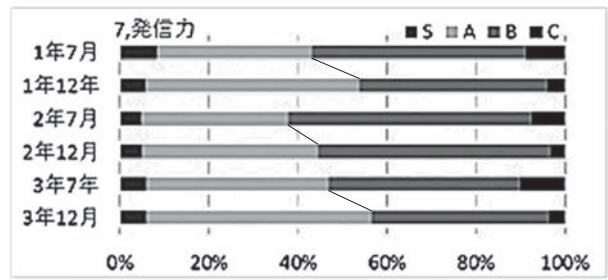
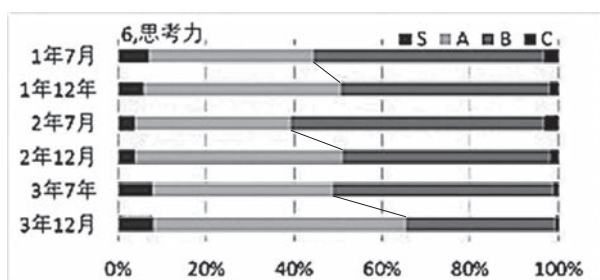
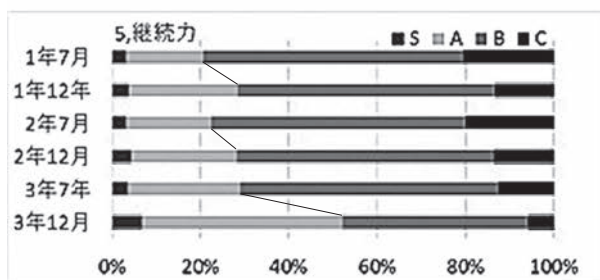
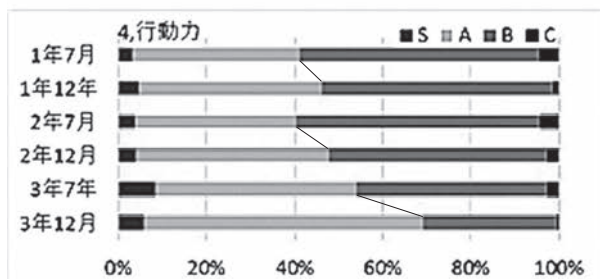
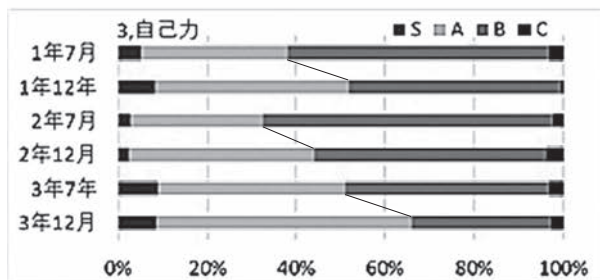
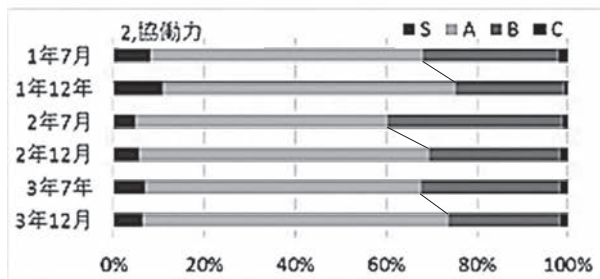
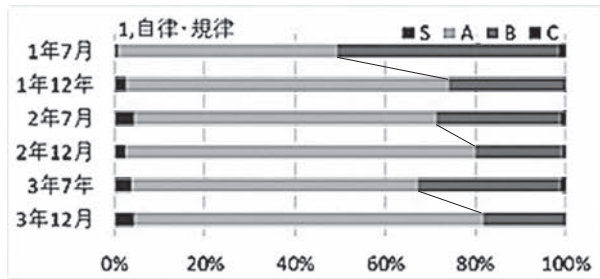
### Ⅲ. TGP自己評価の結果

次のレーダーチャートは、2019年度に2回(7月19日、12月24日)実施した生徒自己評価を数値化し、その平均点の変化を学年別に示したものである。(S:5点, A:4点, B:2点, C:1点)



7月と12月を比較すると、全学年とも全項目において数値が高くなっており、特に3年の伸びが顕著である。また次のグラフは、自己評価の基準(S, A, B, C)の学年ごとの変化を、SとAを合計した割合に注目しながら「8つの力」ごとに示したものである。なお、グラ

フは左からS, A, B, Cであり, Aを目標達成レベルとしている。(別添資料2参照)



S, Aと答えた生徒の割合が20pt以上増加した項目は, 1年の「自律・規律」(24.6pt)と3年の「継続力」(23.0pt)であった。「自律・規律」については, 2, 3年に比べ1年での伸びが顕著である。それに対し, 「継続力」は, 1, 2年ではなかなか身につかず, 3年での伸びが大きい。受験勉強を通して身につくことも考えられるが, 興味ある結果であり, 継続的な調査が必要である。

S, Aと答えた生徒の割合が各学年で同じように伸びた項目は「自己力」であった(1年13.8pt, 2年11.6pt, 3年14.9pt増)。学校生活全般での経験や達成感を通して, 「自己肯定感」や「自己認識」が高まるのかもしれない。ただし, 2年の数値は低く, いわゆる「中だるみ」の現れである可能性がある。

「思考力」は, 1年に比べ2, 3年での伸びが大きい。2年で実施している課題研究や, 3年における受験意識の高まりが影響していると考えられる。

TGP自己評価を利用することで, 生徒の資質・能力の変容を, 生徒自身はもちろん教員も数値として確認できる。自己評価を定期的に継続して実施し, 評価票の内容等について, さらなる検討を進めていきたい。

なお, TGP自己評価については, 3学期末にも実施し, 内容等についてさらなる検討を進めていく予定であったが, 新型コロナウイルス感染症拡大の影響で学校が休校となり, 多くの試みが実施できなくなったのは残念であった。

#### IV. 新たな学びに向けた授業改善の取り組み

砺波高校の生徒は, 総じて資質に恵まれ, 素直で着実に努力を重ね, 課題に対して真面目に粘り強く取り組む生徒が多い。反面, 積極的に創意工夫したり, 新たなことに挑戦したりする姿勢に欠ける面がある。これからの社会に求められる批判的思考力, 創造的思考力を持った生徒を育成するため, ICT等も活用しながら, 主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を

図る必要があった。

そこで、新たな学びに向けた授業改善を進めるため、以下のような様々な取り組みを進めてきた。

### 1. 校内研修により職員の改革意識を高める

2017年度から、文部科学省教科調査官や大学教員等を招き、高大接続改革や学習指導要領の改訂、主体的・対話的で深い学びなど、教育改革の方向性を学ぶ研修会を、定期考査の午後を中心に年間行事に組み込んだ。原則全員参加とし、グループによる意見交換の時間を設けることで、自校の教育についてより深く考えることにつながった。また、職員会議後に、教員の研修会や出張報告会を行うことで、すべての教員が情報を共有し、職員全体として授業改善への意識啓発の機会となった。

以下は、2019年に実施した校内研修の概要である。

#### ① 3月20日

演題：これからの高等学校教育の方向性について

講師：東洋大学教授 後藤顕一

概要：「変わらなくてはいけないもの、変わってはならないもの」をテーマに全国の事例紹介や、授業改善の視点について。

#### ② 7月1日

演題：SDGsを知る。学びに向かう意識を変える。

講師：富山県立大学准教授 清水義彦

概要：SDGsとは何か、今なぜSDGsなのか、進路指導とSDGsについて。

#### ③ 11月8日（公開で実施）

演題：「深い学び」につながる授業とは？

講師：文部科学省教科調査官 野内頼一

概要：教えるのではなく気づかせる、問いの工夫で思考を深める、活動の主体は生徒、など実際の授業を例にディスカッション。

#### ④ 12月3日

演題：授業改善の取り組み（発信力を高める）

講師：文部科学省教科調査官 野内頼一

概要：前回の議論を深めるため、グループワークを中心に、教科間で授業における悩みや改善について共有化を図る。



校内研修におけるグループワークの様子

### 2. 授業改善の工夫と公開授業の実施

砺波高校は、2018年度から県教育委員会が指定する「新たな学び創造授業」の拠点校となり、新学習指導要領に示された主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善を行い、確かな学力と豊かな人間性を育成するための取り組みを進めてきた。

その成果を外部に発信するため、2019年11月、県教委とも連携し、公開授業を実施した。他校から54名の参加があり、授業改善の取り組みを進めていることを外部の方に見てもらい、意見をいただける貴重な時間となった。



公開授業の様子

### 3. 互見授業の実施

教員が互いに授業を参観し、授業内容や発問等について情報を交換することは、自分自身の授業を見直すよい機会となる。

年2回、それぞれ約3週間、すべての授業を公開授業とする「互見授業期間」を設け、見学した授業について見学者が報告書を作成し、授業者に知らせる取り組みを行った。以下は2019年度に実施した互見授業の概要である。

<実施期間>

5月27日（月）～6月14日（金）

10月21日（月）～11月8日（金）

<実施方法>

他教科の授業見学も可とし、1つ以上の互見授業を行う。また、互見後、参考になった点などを書いた報告書を提出する。報告書は一覧にし、校内で共有する。

<結果>

互見数は、報告書提出分で105回となった。以下は、参観した授業に対する感想の一部である。

<現代文B>

適宜生徒に考えさせ、話し合いをさせ、思考を停滞させない工夫がされていた。

<日本史B>

タブレットを利用して見やすく整理されている。生徒は意欲的で明るい雰囲気の授業であった。

<数学γ>

問題演習の授業で生徒に解説させ、論理的に正しいか、なぜその手法を用いたのかなど、時間をかけて考察させている点よかった。

<化学>

問題演習の際、必要に応じてスクリーンに画像等を写し出すことで、生徒の思考の助けとなっていた。

<家庭基礎>

身近な地域、本校の先輩の取り組みからSDGsについて考えさせると同時に、生まれ育った環境や母校に誇りをもたせることもできる素晴らしい授業だった。

<保健>

ICTを使い、これからの時期にふさわしいインフルエンザの題材が生徒の興味・関心を引いていた。

<英語>

特にQ & Aの解説等も英語での説明だったのが素晴らしかった。生徒に考えさせる時間が確保され、授業の流れもよく考えられていた。

#### 4. 思考力を問う問題の作成

大学入試は、知識・技能だけではなく、思考力・判断力・表現力も重視した入試へと転換が示され<sup>(4)</sup>、高校においてもその対応が必要となった。思考力・判断力・表現力等を高めるための授業づくりを進めるためには、高校で行う考査等の問題づくりにも工夫が必要との考えから、思考力等を問う新テスト対応の問題を、考査問題に10%程度盛り込み、教務に提出する際には、その問題に赤丸を記して示すこととした。

#### V. おわりに

学校の方向性にかかわる重要事項を、希望すれば誰でも参加できる学校活性化委員会で議論し、形としてきた。行事の見直しも授業の改善も、根本に「学校としてどんな生徒を育てたいのか」という理念があり、「そのために行事や教科で何ができるか」という視点で考えることの重要性を再確認することができた。そして、話し合いの中で「本校の果たすべき役割」と「育てたい生徒像」「3

年間で身につけさせたい力」が整理できたことは大きな成果であった。

また、学校活性化委員会が立ち上がり、活発な意見交換が行われた要因には、以前から行っていた校内研修の存在も大きかった。校内研修を通じて、教員間で日本の学校教育の方向性について理解が深まり、教員それぞれが、自校の教育についてより深く考えるようになった。そして、教員が「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を意識することにつながった。そうした土台があったからこそ、本委員会で本校の今後のあり方を議論した際に、各教員が教育動向を踏まえた上での大局的な観点から自分の意見を述べることができ、建設的な議論となった。より多くの教員が意見を出し合っただけでなく、学校全体での共有もしやすくなる。ボトムアップの意思決定方法が効果的に機能したことが、最後には生徒の資質・能力を育むことにつながり、それが砺波高校の最大の強みとなった。

学校活性化委員会の取り組みは、まだ道半ばだが、新しい時代に向けた授業改善につながることを目標として、これからも教員一丸となって進めていかなければならない。

#### 註

- (1) 高等学校学習指導要領総則 文部科学省, 2018, pp.20
- (2) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申), 2016.12.21, 「資質・能力の三つの柱に基づく教育課程の枠組みの整理」 pp.28-31
- (3) 教育課程の見直し, 教員研修や生徒課題研究・海外研修等の企画・運営など, 校内における教育改革を進めるため, 2018年度に新たに立ち上げた分掌。
- (4) 大学入学共通テスト実施方針策定に当たっての考え方, 文部科学省, 2017.7.13

(2020年8月31日受付)

(2020年9月30日受理)

## 砺波高校で育てたい生徒(人物)像



- ・ 地域を担うことのできる生徒(人物)
- ・ 時代のニーズに応えることができる生徒(人物)
- ・ 自ら目標を定めそれに向かって地道に、  
かつ、しなやかに生きる自立した生徒(人物)

上記のような生徒を育てるために砺波高校では、授業で培われる「知識・技能」に加え、8つ力(ちから)を掲げています(以後TGP[Tonami Graduation Policy]と呼ぶ)。これらTGPを、卒業までの3年間に身に付けてもらうべく、授業は勿論、学校行事や部活動など、すべての教育活動を実施しています。(教育活動の種類や内容により、重点をおくTGPは異なる。)

### TGP(8つの力)

	TGP	概 要	キーワード
1	<b>自律・規律</b>	社会規範を正しく理解し、自ら守ることができる。	公平・公正・規範意識
2	<b>協働力</b>	自分や他者を理解し、多様性を認め、他者と協力し、取り組むことができる。	協調・協働・思いやり・謙虚・多様性尊重
3	<b>自己力</b>	達成感の積み重ねから自信を持ち、自己評価・分析ができる。	自己肯定感・メタ認知
4	<b>行動力</b>	指示待ちでなく、自分の考え行動することできる。	行動力・積極性
5	<b>継続力</b>	困難にも粘り強く柔軟に対処し、積極的行動を継続できる	粘り強さ・柔軟性・計画性
6	<b>思考力</b>	なぜなのか、本当にそうなのかを考え、事実を客観的に分析できる	課題発見力・論理的思考力
7	<b>発信力</b>	自分の考えを言語化し、わかりやすく他者に伝えることができる。	発信力・表現力
8	<b>創造力</b>	課題解決に向けての創造ができる。新たな価値を生み出す。	創造性・課題解決力

### 校訓とTGPとの関連

校訓	概 要	TGP
<b>道義為之根</b>	人間にとって最も大切なことは、人として踏み行おうべき道、すなわち「道義」である。(百周年史より)	<b>自律・規律</b>
	公正、公平、そして多様性を認め良好な人間関係を築けることが人として踏み行おうべき道であろう。	<b>協働力</b>
<b>質実剛健</b>	外側を飾りたてることなく、内なる「強靭さ」を身につけているさまを示す言葉である。(百周年史より)	<b>自己力</b>
	短所を認め長所を理解し、自己を肯定することにより内なる強さが生まれ、積極的行動につながる。	<b>行動力</b>
<b>自彊不息</b>	易経の…一説に由来…「自ら努めて怠ることがない」「努力を継続する」の意(百周年史より)	<b>継続力</b>
	自彊不息＝継続力、そして物事を継続するには確かな分析力と思考力が求められる。	<b>思考力</b>
<b>進取而敢為</b>	新たな事をも進んで取り入れ、敢然と実行に移す。(百周年史より)	<b>発信力</b>
	これまで経験したことのない新時代に対応するには、豊かな創造力とそれを発信する力が不可欠。	<b>創造力</b>

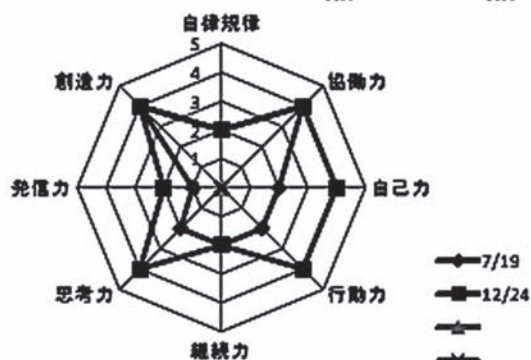


## TGP自己評価

本校では、生徒の皆さんに、卒業までの3年間に、この8つの力を身につけてもらいたいと考えています。(以後TGP〔Tonami Graduation Policy〕と呼ぶ)そのために、学校では学校行事をはじめ、多くの教育活動に取り組んでいます。

・あなたは今、どの位置にいますか。率直に書いてください。

TGP		目標達成度評価基準表				評価							
		S	A(到達目標)	B	C	7/19	12/24						
道義為之根	自律・規律 公平・公正・ルール、マナー遵守	Aに加え、周囲にも喚起できる。	校則、挨拶、清掃、時間管理について理解し、ほぼ実践している。	Aのうち、できていないものが1～2ある。	Aのほとんどができていない。								
	協働力 協調・協働・思いやり・謙虚さ	Aに加え、社会の多様な価値観を認め、多様な視点に立つことができる。	自分や他者を理解し、他者と協力し、取り組むことがほぼできる。	状況により、Aの時とCの時がある。	他者を理解せず、自分の考えに固執する。逆に、他者に合わせ、自分は我慢する。								
資実剛健	自己力 自分を正しく評価する	Aに加え、自己の強弱を知り、それを進路選択に繋げられている。	自分の長所、短所を理解し、物事に積極的に取り組もうとする。	自分の長所より短所が意識され、消極的になる場面が多い。	自分の長所が見いだせず、何事にも自信が持てない。								
	行動力 自分の考えに基づき行動する	Aに加え、周囲を巻き込んで進めることができる。	自分がとるべき行動を見つけ、実行することがほぼできる。	状況により、Aの時とCの時がある。	言われたことはするが、自ら動くことはない。								
自強不息	継続力 粘り強さ・計画性・柔軟さ	Aに加え、うまくいかない場合は修正しながら継続していける。	計画を立て継続的に実行することが、ほぼできる。	計画を立て継続的に実行しようとしているが、持続しない。	その日の気分で物事に取り組むことが多い。								
	思考力 課題発見力・論理的思考力	Aに加え、自分の理解を他の人に説明することができる。	疑問を感じた時、「なぜか」を、根拠に基づき論理的に考えることができる。	疑問を感じた時、「なぜか」を、深々と考える。	疑問を感じても、「なぜか」を考えたいことはほとんどない。								
進取而敢為	発信力 分かりやすく他者に伝える	Aに加え、より分かりやすくなる工夫して伝えることができる。	伝えたいことを、伝えることがほぼできる。(自分の中で言語化できる)	状況により、Aの時とCの時がある。	伝えたいことが、伝えられないことが多い。								
	創造力 創造性・課題解決力	Aの結果、実際に新たな物(方法、作品)を生み出したことがある。	既存の物(方法、作品)にとらわれず、よりよい物(方法、作品)を模索しようとする。	既存の物(方法、作品)の中で考えることが多く、新しい発想が少ない。	既存の物(方法、作品)を踏襲し、新しい物(方法、価値)を模索しない。								
						S 5点	A 4点	B 2点	C 1点	合計	合計	合計	合計



※ 評価に関わった具体的な事例があれば記録しておこう。  
(例) 合唱コンクールで… 課題研究で… 新人戦に向けて…

1年 2組 12番 氏名

主な諸活動において特に身につけたい力(TGP)

	活動名	TGP							備考(目的、ねらいなど)
		自律・規律	協働力	自己力	行動力	継続力	思考力	発信力	
一学期	共同宿泊学習(1年)	○	○	○				○	・生徒同士、教師との理解を深める。 ・高校生としての学習スタイルを身につけるためのオリエンテーション
	応援歌練習会(1, 2年)	○	○		○				・挨拶、校歌、応援歌の練習を通して高校生としての自覚を高める。 ・校則、挨拶、時間管理について理解し、実行する。 ・相手の立場を理解し、自分がとるべき行動を理解して実行することができる。
	応援歌練習会(3年)	○	○		○			○	・最高学年としての自覚をもち、個性や特性に応じてリーダーシップを発揮する。 ・校則や校風、伝統の在り方を考え、自分なりの志をもって最後までやりとることができる。 ・自分の役割を理解し、他者を思いやり協力し合って進めることができる。
	体育大会	○	○		○			○	・自主的にルールを守り、協力して責任を果たす習慣を身に付ける。 ・学級や色団、部活動単位での望ましい人間関係を形成する。 ・身体的な活動を通して、互いのよさを認め合い、創意工夫して創造的な活動を行う。
夏休み	研修旅行(2年)	○	○		○				・道路意識の高揚・豊かな人間形成の育成
	エキスパートに学ぶ(1年)	○	○	○				○	・職業理解と健全な職業観の育成
	卒業生と語る(1年)	○	○	○				○	・大学学部学科理解と道路意識の高揚
	地域調査(2年文3)		○		○		○	○	・地域調査の手法を学ぶ。地域調査により、地域の歴史、民俗、地域振興の実態を学習する。
	臨海実習(2年理3)		○				○	○	・探究的な活動を通して、協働性、課題発見力、科学的思考力を育成する。
	エンパワメントプログラム(希望者)		○	○		○		○	英語を使いながら、積極性とリーダーシップを養成する。
二学期	課題研究(2年)		○				○	○	協働的な学習を通して、コミュニケーション能力の向上と、思考力、判断力、表現力の育成と課題解決能力の育成を図る。
	砺高祭		○		○			○	・部活動や委員会単位で練習や準備等を工夫し、主体的によりよいものを創り上げることができる。 ・自分の役割を理解し、他者と協力して創造性豊かな表現活動を行う。
	合唱コンクール		○				○	○	・練習方法や表現方法を創意工夫し、学級全員が協力して合奏曲を歌い上げる達成感を味わう。 ・自分の役割を理解し、他者と協力して創造性豊かな表現活動を行う。
	アメリカ研修(希望者)		○		○			○	・広い視野の国際的教養を身につけた自立心に富む人材の育成
三学期	ビブリオバトル(1, 2年)		○				○	○	・読書に関心を持ち、本から得た感動を相手に伝えることができる。 ・相手の発表に耳を傾け、理解・共感することができる。
	英語スピーチコンテスト(1年)			○	○			○	・英語による自己表現力を伸ばす ・他の生徒の意見を聞き、視野を広げる。
	合格者にきく(1, 2年)		○	○			○	○	・道路目標の設定と目標達成に向けての展望
通年	各種式・式典	○							
	定期考査、各種テスト、模試			○		○	○	○	・学習計画立案と、学力の自己評価、分析
	清掃活動	○	○			○			・毎日地道に取り組む姿勢と公共心を育み、互いに協力し、また率先して行動する力を身に付ける。
	部活動	○	○		○			○	・高校生活の充実と各部の特徴を生かした活動内容の質の向上を図る。 ・異なる年齢の生徒同士で協力し合い、主体的な活動を通して個性の伸長を図る。 ・他者との関わりを通してコミュニケーション能力を高め、多様な視点に立った言動を身に付けることにより協調性や社会性を身に付ける。

